

エミリー・ブロンテの研究

—*The Mind of Emily Brontë* について—

宮川下枝

先回の小論に於ては Herbert Dingle による *The Mind of Emily Brontë* なる書物が、ハワースの書店より神戸の教授によって届けられたことを述べた。幻の書であっただけに、私には非常な喜びであったが、今回はその中の興味深い論点を、二、三挙げてみたいと思うのである。自分の考えを表明しようとしな、エミリー・ブロンテが心の底で考え続けたことは一体何であったのであろうか。本の題材だけでも十分に興味をそそる。

1. Heathcliff の出生の秘密

忽然として現れ、素姓も知れぬヒースクリフの出現は、興味深い論点となる箇所であるが、Dingle 氏もこの Heathcliff の出生の秘密については実に細かい読みをし、又興味深い解釈の仕方である。又この解釈は私が長い間問題として、種々に考えて来た *It would degrade me to marry Heathcliff now.* なる Cathy の言葉に対する解釈ともなっている点更に興味をそそられるわけである。

何故、キャサリンはヒースクリフと結婚出来ないと言うのか。

最初に、私はこれはエミリー・ブロンテが愛というものを壮厳視した結果であらうと解釈した¹⁾。

次には、人間の利己主義に対するエミリーの解釈であらうと考えた²⁾。

氏の解釈によれば、二人の愛は brother-and-sister love であって、lover-sweetheart love とは異なるのであると解く。この二人がこのように激しく愛し乍ら、結婚を望まないのは不自然である。それは二人が母を異にする異母兄妹であり、即ちヒースクリフはアーンショー氏の私生児であり、二人

はこの事実をよく知っているからであるとするのである。

My love for Linton is like the foliage in the woods.....

My love for Heathcliff resembles the eternal rocks beneath:

(*Wuthering Heights* Chapter IX)

「私のリントンへの愛は、森の中の木の葉のようなものであるが、私のヒースクリフへの愛は地の中の岩の永遠さにも似たものである」というこの二人の清烈な愛は、兄妹であるからこそ感じ合うことが出来るのである。私の総べては、ヒースクリフであるという異質の愛は異性間の愛ではあり得ないと Dingle は解釈している。

では、ヒースクリフがキャサリンと異母兄妹であるということの証明が必要になって来るが次のように説明している。

(一) 嵐ヶ丘アーンショー一家に共通な狂暴性

アーンショー一家に属する者は皆狂暴な血をひいていて、ヒンドレー、ヘヤトン又キャサリン自身そうであって、部外者はヒースクリフだけであるが、ヒースクリフがかくも狂暴なのはアーンショー一家の血を分けている証拠であると Dingle 氏は説明する。

this supposition would account for a common quality of wildness that, notwithstanding their differences, characteristic all the Earnshaw family—Hindley and Hareton as well as Catherine—and outside that family is found only in Heathcliff.³⁾

(二) Heathcliff という名について

I found they had christened him “Heathcliff”; it was the name of a son who died in childhood, and it has served him ever since, both for Christian and surname.’ (Chapter IV)

(私はその子にヒースクリフという名が付けられたことを知りました。これは、子供時代に亡くなったアーンショー氏の息子の名でした。以来苗氏とも呼び名ともなって、ずーとついていました。) とネリーはロックウ

ッドに話しているが、この自分の亡き息子の名を付けたのは、これも暗にこの少年がアーンショー氏の私生児であることを暗示する為のものであるとデングル氏は考える。

(三) ヒースクリフの出現

エミリーは何も説明はしていないが、ヒースクリフの連れて来られた当時の話そのものの中に、普通ではあり得ないことが沢山に溢れている。不可能とまでは言わずとも Dingle 氏は述べるのである。

the story itself is as full of sheer improbabilities—not to say impossibilities⁴⁾

Here it is, as told by Nelly Dean to Lockwood:

としてネリーの物語の話が長々と引用されているのである。

‘Oné fine summer morning—it was the beginning of harvest, I remember Mr. Earnshaw, the old master, came downstairs, dressed for a journey; and after he had told Joseph what was to be done during the day he turned to Hindley, and Cathy, and me—for I sat eating my porridge with them—and he said, speaking to his son—‘Now, my bonny man, I’m going to Liverpool to-day, what shall I bring you? You may choose what you like: only let it be little, for I shall walk there and back: sixty miles each way, that is a long spell!’.....(Chapter IV)

(以下略す)

そして Dingle 氏の述べるところのこのネリーの話の中で、どうも腑に落ちない幾つかの点 improbabilities をあげるならば、

アーンショー氏は豪農の主人であるから、忙しい季節である筈の収穫を控えての夏に、わざわざ、リバプール迄も出かけるのは可笑しい。収穫の始る時期と言えば、農夫が不必要に留守を長びかす等はとても似つかわしくないことである。

‘the beginning of harvest’ was probably the most unlikely time at which a farmer would prolong his absence needlessly.⁵⁾

又子供達に土産は何がよいか、軽いものだよときいているのは、別に大きな荷物を持ち帰ることの必要性を予知してのことであろう。

the one that Nelly Dean remembers after thirty years is the request that his children's choice of presents shall not be heavy ones, because he would have to carry them a long way...⁶⁾

夏であるのに、何故、大きな外套を着て出かけたのであろうか。外套の下に隠して持ち帰る必要のあるもののことがアーンショー氏には予知されていたからであろう。

he takes his great coat all the long journey, although it is summer.⁷⁾

話のきき手である、ロックウッド氏は何故その点について疑問をはさまなかったのであろうか。それは厳しい冬のさ中であって、彼が嵐ヶ丘を訪れた時は彼自身重い外套に身を包まれていたから、疑問を感ずる余地がなかったのであると Dingle 氏の推理はなかなか興味深い。

では、何故アーンショー氏はリバプール迄の遠い道のりを歩いて出かけたのだろうか。馬車もあったことだし、馬はちゃんと居たわけであるのに、わざわざ徒歩で出発したのは最初から何かもくろみがあったのであろう。

a farmer, to whom horse-riding must have been second nature, and whose well-filled stables are brought to our notice, was choosing to walk a distance of 120 miles. Why?⁸⁾

又エミリーはここに於て実に緻密な計算をして、朝発ち三日目の夕方72時間後に帰宅させている。彼は少なくとも120マイルは歩かなければならなかったであろう。それは子供の足に合わせて歩かなければならないからであるし、又途中で食物を食べさず時間も見なければならぬからである。嵐ヶ丘からギマトンへの距離さえ述べないエミリーがここにかくも詳しく距離、時間の計算をしているのは、読者に察知して貰いたいことがある証拠である。

帰ってからのアーンショー氏は死ぬ程、疲れていて、その大きなマントの下に連れて来た色の真黒い少年を皆に紹介する。而も奥さんには「神から

授ったものと思え」と言って渡す。

“And at the end of it, to be flighted to death” he said, opening his great coat, which he held bundled up in his arms, “See here, wife; I was never so beaten with anything in my life; but you must e’en take it as a gift of God, though it’s as dark almost as if it came from the devil.”

(Chapter IV)

エミリーが、このように詳細にアーンショー氏の旅行の出発、帰宅の状況について物語っているのは、彼女が当時としては公言出来ない事実を読者に悟って欲しい為であると Dingle 氏は説明する。更に氏の説明を続けてゆこう。

又 kidnapping (誘拐) 自体を考えてみても、ヒースクリフの年頃の少年が、一人で歩いていたとしても、親もとを離れ又保護者のもとからさまよい出ていると、一体誰が疑うことがあるだろうか。当時としては、浮浪少年が居たには居たが、そうした子供達は数少ないことであったし、又居たにしても誰かに世話になったかであろう。何もアーンショー氏が家族に迷惑をかけて迄、無理矢理に長のみちのりを連れて帰へることもなかったであろう。又ヒースクリフは特別に (appealing) 魅力的な少年であったかと言えそうではなく、彼は (repellent.) 反撥的な少年であった。だからアーンショー氏がこの少年に心ひかれて連れて来たとはとても考えられない。ヒースクリフはアーンショー氏の隠し子である故に、氏はわざわざこの子連れに行つた事実を匂わせる為のエミリーの計画である。としている。

Even the incidental aspects of the affair seem to have chosen to give it the maximum improbability.⁹⁾

その後のアーンショー氏のヒースクリフに対する並々ならぬ可愛がり方。

‘he took to Heathcliff strangely’ (Chapter IV)

又夫人の不機嫌さは、この間の消息を物語る為のエミリーの工夫である。

my mistress grumbled herself calm: (ibid.)

元来エミリーは、自分の小説の中に、ある人物を登場させる場合、その歴史、出生を事細かに説明したり、出現の模様を描写したりする人ではな

い。その例として、

リントン、ヒースクリフと、キャンシイの文通の為に、誰か使いの者が必要となった時は、ある少年が現れる。後用事がすめば忽然として消える。又羊飼の少年も同じような役に用いられている。エレン、デーンは、お医者様を呼びにやる為誰か男に頼む、又嵐ヶ丘に閉じ込められたキャンシイを救う為には四人の男が用いられ、又ロックウッドが嵐ヶ丘で一夜を過す必要のある場合は吹雪をおこしている。又更に彼がネリー、デーンから物語をきく必要がおこるや彼を風邪にってしまう。若いキャンシイが嵐ヶ丘にリントン少年に逢いに行く必要があれば、ネリー、デーンは嵐の為に風邪で寝こむ。キャンシイとヘアトンが仲直りする必要のある時は、事故の為ヘアトンは家に居ることを余儀なくさせられる。

姉シャーロットの好むような偶然の一致ということは、しないのであるが、物語の必要性から男子でも女子でも人物が必要とあれば、常に手近に人物が備えられていることで、必要な活動が終れば、その人物は消滅するのである。

the point is that the agent is always at hand when the main course of the story needs him or it, and, the necessary function having been performed, is forthwith annihilated.¹⁰⁾

出来事に於いても同じであって、ヘアトンを出現させる為には、フランスという女性が必要とされ、ヒンドレーによって突然連れて来られ、仕事を果せば直ちに消されてしまう。

ヒースクリフにしても三年間の失踪より、無学な一文なしの青年が、富める教養を身につけた紳士として戻って来ている。イザベラとその子にしても、ロンドンへとヒースクリフのもとを遁れている間の消息は我々には何もきかされていない。このように無用なことには全然触れようとしないエミリーである。こうしたエミリーの態度に対して一つだけ例外がある。それはヒースクリフの出現についてである。

それは必要もないような詳細を山のように積み、作品の中には何処にも見受けられないような豊富さで物語られている。

To this there is one exception—the advent of Heathcliff. That is told with a wealth of inessential detail found nowhere else in the book,¹¹⁾

我々が知る必要のあることは、ヒースクリフがこの家族の中へ紹介されることであるが、これは、アーンショー氏が友人の孤児を貰って来たとしても、いい筈である。それをエミリーがかくも事細やかに、その子の連れて来られる手順を述べているのは、彼女に特別の意図あつての事としか考えられないのである。それは即ち、ヒースクリフはアーンショー氏の息子であるということを示す為のやり方であると考えるのが最も適切な解釈法であると氏は述べる。

It seems to me impossible to explain the appearance of this story in such a book without supposing that Emily Brontë had a very particular motive in introducing it, and I can see non other than that of telling us, in the manner she considered most appropriate in the circumstances, that Heathcliff was Earnshaw's son.¹²⁾

では何故エミリーは、自分の習慣を破って迄も、このように事細やかにヒースクリフの出現の事情を書かねばならなかったのであろうか。

それは当時の掟として、このような事情は大っぴらに書くことを許されぬ時代であつたからである。彼女自身 sex のことについて書くことの気恥しさ、又当時一般に、sex のことについて述べるのは配慮のないことだと思われていた時代なので、彼女としては、事実を事細やかに述べれば誰でも間違いなく悟ってくれるだろう、彼女の意のあるところを分ってくれるだろうとした、のだと氏は考える。

What I would suggest is that—through, perhaps some natural shyness coupled with her interpretation, at least of the attitude of the public at that time to real or imagined indelicacy in sexual references— she thought it best to express the fact of Heathcliff's origin in a manner which, without offending susceptibilities, would make her meaning so clear that no one could mistake it.¹³⁾

非常に興味深い、氏の読みとり方であつた。

ただ思うのは、これで完全に解答となるであろうかということである。どうも唯一つの言葉だけを説明し尽せていないように私は考えるのである。‘It would degrade me to marry Heathcliff now’. なる、この *now* という言葉にはどのような解釈を与えることが出来るであろうか。異母兄妹である事実が、時を経るにしたがって変わるわけでもなからう。大人になればその事情が消滅するというものでもない。今は駄目だ。今は結婚出来ない。と言っても、この事情を踏まえているとするならば、二人が晴れて結婚出来る日は来ないであろうから、どうもこの解釈にも少し無理があるように私には考えられる。

又もう一つ私として、この説に対して異議をはさみたいのは、ではヒースクリフとヒンドレーとの関係をどのように解釈するかということである。ヒースクリフがキャサリンと異母兄妹であると仮定するならば、キャサリンの兄であるヒンドレーとも異母兄弟ということになるわけである。だがヒースクリフのヒンドレーに対する激しい憎悪はどうであろう。

又あの悪質な復讐はどうなるのであろう。ヒースクリフはキャサリンだけには復讐の手は伸ばさなかった。それが血の繋がった妹であるからとしても、では同じく血の繋がった兄には何も愛情を感じなかったのであろうかという問題が残る、氏の解釈もどうもそのあたりに無理があるように私には思えるのである。

ともあれ、実に興味深く読んだ論点であった。氏もエミリー自身が自分の物語がこのようにいろいろ考えられていることにびっくりするであろうと書いているが、確かにお墓の中で彼女は驚いていることであろう。

I think she would have been astounded beyond measure to know that after more than a hundred years of copious detailed criticism, both expert and amateur, her utterly incredible story would have been almost universally accepted at face value.¹⁴⁾

エミリーは、常に小説の外側に立ち、小説の中の人物の行動に対しては、責めもせず、ほめもせず、ありのままを描くだけで裁くこともしなかった。

との Dingle 氏の説には私も賛成である。

she herself stood outside and recorded their activities without censure or praise, portraying but not judging.¹⁵⁾

それだけに、エミリーの考えを小説の中に探るということは、困難な業である。更に氏の説を続けるならば、

『嵐ヶ丘』は出版を意図して書かれたものであるだけに、彼女の真意をさぐることはむずかしい。エミリーの詩はそうした意図なしに、書きためられていたものだけに、多くの詩の中には彼女自身がよく現われている。それでも彼女は詩に於いて自分自身を表現したと同じように、小説を書くにあたって意のままに書き、読者の歡心を買おうというような意図は、全然なかったのである。

before ascribing any feature of the work to her natural, spontaneous impulses, that it was not introduced in order to satisfy external requirements.¹⁶⁾

ヒンドレーはヒンドレーであり、ヘヤトンはヘヤトンであり、他と比べてみても無意味である。それぞれの人物は、意のままに歩み行動する。この物語の中心的テーマは、ヒースクリフ、キャサリン、エドガー、リントンとの関係であるが、その一人一人の人物の個性により、非常に特殊な性格を有している。

表面的には似ていても、普通の三角関係とは全く異なるのである。その三角のどの辺に位置する人もその問題の正しい解決方法があるのは当然と考えているのである。どの三人もその解決法に於て論点が異なるのである。到底第三者には理解出来ないような当事者たちの係わり合いである。キャサリンは、エドガーを撰ぶかヒースクリフを選ぶか等ということが問題ではない。彼女にとってそれはどちらを選ぶかというのが問題ではなくて、ヒースクリフともエドガー、リントンをも両方ともを満足させることが何故出来ないのかが彼女には問題なのである。

確かにDingle氏の用いている‘natural, spontaneous impulses’に従って人の意を介せず、思いのままに自由奔放に行動する人物の中に、エミリー

の考えを推理することは出来るであろう。

we can fairly infer that qualities common to all characters or absent from all characters denote qualities that belonged to or were lacking in her own mind.¹⁷⁾

(総べて人物に共通な性格、あるいは人物たちに欠けている性格から、エミリーの性格又は彼女に欠けている性格を推理することが可成りの程度迄出来る。)

キャサリンのリントンに対する愛は、森の木の葉のようなものであり、ヒースクリフに対する愛は、地下の永遠の巖のようなものであると、使い分けの出来る彼女には、二人の男の嫉妬・闘争は理解出来なくて、遂に病気になるってしまう。二つの愛は比較出来るものでなく、彼女にとってはどちらも純粋なものであって、第三者には理解し難い又読者にも理解し難いテーマをエミリーは敢えて提唱するのである。

It is impossible for you to be my friend and his at the same time.
(chapter X)

キャサリンの思いは、夫エドガーにも理解して貰えない。そしてエミリーが我々に説こうとする結論は何であるか、との Dingle 氏の説を更に追ってみよう。

如何に純粋な愛であると考えてみたところで、この世ではそうした関係は認められない。この三人の関係が平和な調和を見出すことは、死後お墓に入ってからのことである。

Mathematical symbols can make a virtue of their properties and compose a highly interesting calculus: human beings, alas, when they are such as these cannot reach harmony until they are sleepers in the quiet earth.¹⁸⁾

数学的にはゆかぬ人間関係であることを認めているエミリーを洞察出来ているところ、氏の解釈は立派なものだと考える。最後の箇所、教会墓地のどてに眠る三つの並んだ墓の意義もここにあるのだと筆者も思い、あのハウースの教会の墓地内又はそのあたりをそのように三つ並んだ墓があ

るのではなからうかと、探し廻ったが遂に見当らなかったことを今思い出しているのである。勿論エミリーの虚構であった。

そして、更に氏は続ける。エミリーは人間のありのままの姿を許容して、人間性を道德化もしなければ、一般化もしない、善悪も述べないし、偉いとか、つまらぬとかも批評もしない。身分が高いとか、低いとかも考えぬ、唯、自然の環境のままにそれらが動くがままに表わしているのである。

There is no moralising, no generalising, no invitation to pronounce a judgment of positive, direct presentation of a natural situation working itself out in its own inevitable way.¹⁹⁾

この考え方には私も賛成で、私もエミリーをこのように解釈して来た。でなければ、あの残忍なヒースクリフという人物を描いたエミリーを到底、理解することは出来ないと思うのである。唯、身分の高低で人の価値を決定しようとはしていないが、身分の高いものに対するヒースクリフとキャサリンの反抗は処々に見出される。

2. Moor に対するエミリーの考え方

さて、氏の説で興味深かった moor に対するエミリーの考え方について、述べることにしよう。

人間をありのままに描くのが、エミリーの特長であって (true to human nature as Emily Brontë understood)²⁰⁾ 先ず一人一人の人物に興味を有しているものであり、周りの物、又その影響ということは二の次である。

she is preeminently interested in individual persons, and only secondarily in thing and general influences.²¹⁾

出来事は人物がひきおこすことなのであり、人物は周囲の出来事によって変ったりは決してしないのである。事件はすべてドラマチックではあるが、そのプロットを織りなすのは人間の情熱なのである。自然を用いるのも人物を描写する為の手段としてであり、自然そのものを説明することに関心はない。

『嵐ヶ丘』に於てもキャサリンのヒースクリフに対する愛は巖のような

ものであり、リントンに対する愛は木の葉のようなものである。彼女は只、ヒースクリフ、リントンを描写したい為であって、景色は、その目的を果す為の手段に過ぎない。キャンイの遠足は“黄金色に輝く午後”であり、キャンイの顔は丁度自然の景色のようであった。光と影が素早く移り変っていった。エミリー・ブロンテにとっては唯一の具体的な人格は真実である。

この点で『嵐ヶ丘』は一般に読み違えられているのである。ヨークシャーの moor の魂に支配されている小説であると一般に解されているようであるが、それは違う。これはシャーロットの解説によるところ大なのであろう。彼女は勿論妹の作品を深く洞察している点もあるが、ある点に於ては、妹エミリーを理解しそこなっている。『嵐ヶ丘』の泥くさささについては、「作者自身が moor で生れたものであり、moor で成長したものであるからその moor が身につけているのは当然であろう。」と彼女は述べる。「彼女が都会に育った人間であったとしたらその選ぶ人物も異っていたことであろう」と。

「修道院に住む尼僧が周囲に住む人々を知らぬように、妹も家の廻りの農民達の生活を知らなかった。」「彼女の性格は明るいというより暗い性格なので、ヒースクリフのような人物をその想像力でもって創り出したのだ。」このような姉シャーロットの言葉によって、『嵐ヶ丘』とは、ある非常に力強い陰鬱な自然の力の化身であって、人間はその自然の力の命令のもとに、制御する力もないままに動き廻る現象のようなものと人々に解されて来た。

Wuthering Heights is an incarnation of a tremendously powerful and sombre natural force, under whose direction the human characters move like unreal phantoms to an end over which they, like their creator, have no control.²²⁾

そしてエミリーの力に支配されたのであると姉シャーロットは評を書いているが、私はそうは思わないと Dingle 氏は述べるのである。

勿論、場面は moor である。それはそうせざるを得なかったからである。

この『嵐ヶ丘』は出版を意図して書いた小説であるから衆目の見るところである以上事実にはうそがあってはならない。常に知らぬ地をさまよひ歩く彼女 (her mind, which was moving in regions dark to her. エミリーの詩) の魂は太平洋の孤島を彼女の創造の場面として選びたかったのである。だが、そこに就いては彼女は知らな過ぎた。『嵐ヶ丘』では単に場所が moor に設定されただけのことである。

他の作家の作品と比較してみる事が一番よく分るのであろう。ではハーデーの *The Return of the Native* 『村人帰る』をあげることにしよう。この小説は先ずあの有名な Egdon Heath の精の呼び出しから始るのである。このエグドンヒースは単なる場所ではなくて、それ自体が生きているのである。その場所自体が今や眼をはっきりと見開いてみつめている。万物が眠りにつくとヒース自体が眼を覚し、聴き耳をたてるのである。夜毎その巨大なヒースは何かを待ち受けているかに見えるのである。それは淋しい面を有し、そこに何らかの悲劇のおこる事を暗示している。

この黙想しているヒースの精が moor を制御した時、始めて場面に人物は登場して来るのである。その背景から徐々にはっきりと現れて来るのである。Eustacia Vye と Wildevve (ユステーシャ・バイとウイルダビー) という二人の主な人間が現れ又消えてゆくのである。ユステーシャの悲劇は彼女がヒースにいどみ、負けてゆくことなのである。彼女は心も体もこのエグドン・ヒースにはなじまない。一方 Clym Yeobright (クレム・ヨープライト) の重要性は名の示す通り、村人なのである。ヒースの産物であると言ってもよい位だ。この広野に対しては無感覚になっている。結局彼は、この地に職業を見付け、又 Thomasin Yeobright (タマシン・ヨープライト) もこの出身であれば、エグドン・ヒースの一部になり切っていて、ユステーシャのように、空中に悪魔がいるとか、木の中にも枝の中にも悪鬼がいる等とは考えないのである。エグドン・ヒースは彼女にとっては決して巨大な怪物ではない。顔に注ぐのはさそりではなく雨の霽である。彼女は本能的に環境に順応して、最後は幸福を得る。

これを『嵐ヶ丘』と比べてみる時、あらゆる点で対照的である。エミリ

ー・ブロンテの moor は決して生きていない。そこは単に人物達が活躍し、運命を決める場所である。その人物の moor に対する態度が彼の或いは彼女の運命を決定する等ということはない。彼等の運命を決めるのは、人間同志の関係である。そのことは彼等がロンドンに生活していたとしても同じことであろう。どちらの作品に於いても人間性が背景となる原始的な自然と交錯してはいる、が前者に於ては、自然が人間を支配し、後者に於てはその不適切を示している。『嵐ヶ丘』の中に、「天国は私の家とは思えなかったわ。家へ帰へりたいと心も裂けんばかりに泣いたの。天使は怒って私をつまみ出すと嵐ヶ丘の頂上、ヒースの上に私を落したの。私は眼がさめて嬉し泣きしてたわ」とキャサリンが言う処があるがこれは大いに読み違えられている。

これをキャサリンとヒースの丘との切っても切れない縁を示すものだと解されているが、そうではない。彼女が去ることの出来ぬ思いのするのは、嵐ヶ丘なる彼女の家であり、何処にその家があるかと彼女を惹きつけるのは彼女の家なのである。

This has been taken to imply an indissoluble kinship between Cathy and Heath, but Wuthering Heights, her home, that she should not leave, and wherever it had been situated, it was her home that would have drawn her back.²³⁾

又『嵐ヶ丘』にはハーデーの作品のような prologue もないし、どこにもあのような moor の描写はないのである。そのようなものは無視されている。

ロックウッドが最初にこの地を訪れたのは冬であり、総べては雪に掩われ、何処もかしこも同じように白一色に見えた。彼が戻って来たのは九月であるから、充分あたりの景色の美しさは意識出来る筈の時期であるのに、一体何が描写されているであろうか。西に沈む太陽の光、東に昇る月の影、ヒースクリフの住いにと歩を運ぶ時は、素晴らしい月明りに、道の小石の一つ一つも数えられ、草の葉も一枚一枚見分けることが出来る程であった。と何処でも経験出来る景色ではないか。あの姉シャーロットの言う「妹

は荒野を愛した。彼女にとってはヒースの陰に咲く花はばらよりも美しく、色あせた山腹の陰気な洞穴の中にも彼女はエデンの園を見出すことが出来た。」というのはどうも嘘で彼女が根本的に望んだのは束縛された生活でなくて、自由だったのである。moor ではなかった。

と Dingle 氏は述べるのである。

以上二つの点が、氏の数多くの細かい研究方法の中で特に私の興味を惹いたものであった。唯景色の描写そのものを描こうとしないで、人物を表わす為の手段として自然をうつしているという氏の説に対しては、私は余り賛成しない。

エミリーは非常に細かい自然の観察者であって実に美事な描写の出来る人なのであるが、それをわざとらしく堂々と描写のみに頁をあけるようなことはしない。唯何気なく事のついでにと言った感じでそれを挟む。そこがエミリーの素晴らしい技巧であると私は考えている。

氏のあげられた光と影の交錯するところなど実に見事な絵である。私もハワースを訪れた時、ああここそがあの光と影の道だと思って写真をうつして来た。moor の描写にしてもハーデーのように賑々しくは紹介しないが、キャンイとリントンの会話の中で語られる二人の天国観。あの中にこそヘザーの咲き乱れる夏の moor の栄光が語られているし、挙げれば数限りないが、moor を充分愛した人だという姉シャーロットの言葉に私は異議を申し立てようとは思わない。

とまれ Dingle 氏の細かい科学的な読みには、私も敬服し、この書物が一度ハワースで注文し送って貰ったがその回は日本に届かず諦めていた幻の書物であっただけに、その翌年この書物を書店のマスターに頼まれてわざわざ日本へお持ち帰り下さった先生への感謝の気持はそれだけ深く、又そうした分だけをよけいに有難味を覚えつつこの書物を読んだ次第であった。

註

- 1) 『ブロンテ研究』 宮川下枝 学書房 p.66
- 2) 「英米文学研究」 第十六号 梅光女学院大学
- 3) *The Mind of Emily Brontë*. Herbert Dingle p.69
(Martin Brian & O'keeffe London)
- 4) " " p.74
- 5) " " p.74
- 6) " " p.75
- 7) " " p.75
- 8) " " p.74
- 9) " " p.76
- 10) " " p.78
- 11) " " p.79
- 12) " " p.80
- 13) " " p.70
- 14) " " p.75
- 15) " " p.53
- 16) " " p.56
- 17) " " p.54
- 18) " " p.56
- 19) " " p.57
- 20) " " p.57
- 21) " " p.58
- 22) " " p.60
- 23) " " p.63